

Artist in School



前橋市立宮城小学校

アーティスト

中島 佑太

牛嶋 直子

榎本 浩子

木暮 伸也

CLEMOMO

豊田 共子



アーティスト・イン・スクール(AIS)とは

アーティストやクリエイターが市内の小・中・高等学校へ出張し、児童・生徒、学校の先生たちとかかわりながらワークショップや授業を行う学校連携事業です。地域や文化の未来を担う児童・生徒たちとアーティストが共同で学び、自分の可能性を考え、発信する表現力や他者とのコミュニケーション力を身につけます。実施にあたっては、アーティスト、時期、内容等について学校の先生たちと一緒にプログラムを組み立てます。

キット教材プロジェクト



令和2年度は宮城小学校で大きなプロジェクトとして、〈キット教材プロジェクト〉を実施しました。図工のキット教材を使って、児童とアーティストが共に学び合うプロジェクトです。群馬県内を拠点に活動する6組(7名)のアーティストが参加しました。6年生の児童は同じキット教材「アミアミアミーゴ」を使って2回作品を制作します。1回目と2回目で児童の制作に取り組む姿勢や作品はどのように変化するのでしょうか。

Artist in School

<参加アーティスト>

中島 佑太

Yuta Nakajima



人々がもつ当たり前やルールを問い直すことに関心を持ち、他の誰かと一緒に遊びながらつくりつくりなったりするアーティスト。

Q.1 なぜアーティストになったのですか?

A アーティスト以外のものにならなかつただけです。もしくは小さな頃から何かを生み出すことをやめなかつただけ。

Q.2 今回のプロジェクトの作品制作の際、なぜつらなかつたのですか?

A 図工は本当に作品をつくらなければいけないものなんではないでしょうか?



この後、水墨画の授業で使う炭の材料になりました。

牛嶋 直子

Naoko Ushijima



自身の心の中にある風景を、主に自作した透明なモチーフを使って再構成し、アクリル絵の具で絵画作品を制作するアーティスト。

Q.1 なぜアーティストになったのですか?

A 小さい頃から絵描きになろうと思っていて、そのまま自然とそうになりました。絵はあまりうまくなかつたけれど描くことは好きでした。周囲の大人が誰も反対しなかつたことに今とても感謝しています。

Q.2 今回のプロジェクトの作品制作の際、なぜ編まなかつたのですか?

A 「自分にとっての使い方」がテーマだったので、私にとっては編むより描く方が自然だと思い、キットを使ってモチーフを作成しそれを絵に描きました。



この後、牛嶋さんが実際描いて絵画の作品になりました。

榎本 浩子

Hiroko Enomoto



日常のなかの些細な出来事に注目し、自分で育てた植物から石けんやろうそくを制作し、最近ではケア/キュア(傷を治す)をテーマに作品を作る。

Q.1 なぜアーティストになったのですか?

A これまでの社会では活動的でエネルギーを消費することが求められ弱さや傷つきやすさへの理解は十分とはいえませんでした。そういった社会に疲れを感じ、弱さへの理解を伝えるためにアーティストになりました。それは自分が生きるために必要なことだからです。

Q.2 あなたにとっての図工とは?

A 図工が一番好きな教科でした。耳からの情報処理や発話が苦手な授業に追いつけなかつたため、手を動かしてものを作ることができる図工の楽しさに救われていたからです。



木暮 伸也

Shinya Kigure



フォトグラファー/現代美術家。地域や日常などありふれた風景からの着想をもとに作品を制作。近年では写真を使用した作品を多く手がける。

Q.1 なぜアーティストになったのですか?

A 自分の考えていることと思っていることが、様々な手段で実現されるのは面白い。いろいろ首を突っ込んでいく中でアートと呼ばれるジャンルに永居させてもらっています。ときには作品を作り、ときにはアートを応援する活動をしたり、写真を撮影したり、日常を楽しんだりしています。

Q.2 なぜ(写真を)編むのですか?

A 織物や、筵、藁草履など歴史的なものであり比較的身近にある文化、技術を使って作品を作れないかと模索していく中で写真を編むことを思いつきました。時間や空間の異なる複数の画像がモザイク状に入り混じる写真上のイメージに興味を持ち続けています。



Artist in School

クレモモ

CLEMOMO

モモ クレム



カナダ人のクレムと日本人のモモによるアートグループ。常に異なる技法や素材(ごみや自然の素材を使用することが多い)を試している。いつものテーマは「背景を知らなくても、単純に、見て、面白がれるもの」。

Q.1 なぜアーティストになったのですか?

クレム
A 私の脳は制作に没頭することが得意です。でも好奇心が強く飽きやすいので、すぐに違うことを始めたいです。いろいろなことをしているのがアーティストだから、という理由です。

モモ
A 自由な芸術家や作品に影響を受けてきました。わたしもそうありたいと思ったからです。

Q.2 日本のキット教材についてどう思いますか?

クレム
A 第一印象は「つまらない」でした。でも私たちは自由に作っていた(自由に作ってと言われてもいた)ので、面白かったです。もし解説通りに作らねばならぬとしたら、それはつまらないものだったでしょう。

モモ
A 集中すること、工作の技術を学ぶものという印象です。自由や美を学ぶことが目的だとすれば、他の要素が必要だと思います。説明書を読まずに始めてみるのはいかがでしょうか?



豊田 共子

Tomoko Toyoda



染織家。糸を染め、様々な色の糸を組み合わせながらタペストリーなどの大型の作品までも制作する。

Q.1 なぜアーティストになったのですか?

A 祖母の家が機屋で、幼い頃そこを訪れた時、のこぎり屋根の工場から聞こえてくるカシャカシャカシャ、というリズムカルな機音と、織り上がった検品のための赤い透き通った絹布を見た時から、今思い起こすと、私の原点です。

Q.2 あなたにとっての図工とは?

A 図画工作含めて、何かを創り出すことが人生をこんなにも心豊かにするものだと今は気がつきませんでした。ちょっと残念です。



活動プロセス PROCESS



1 アーティストの制作 (動画撮影)

6組(7名)のアーティストが宮城小学校の図工室に一堂に集まり、「アミアミアミーゴ」を使い作品制作を行う様子を撮影しました。持込む素材や道具を限定せず、技法も編む、組む、織るだけに捉われず、それぞれのアーティストが自由な発想で作品を制作しました。

日程 10月22日



休み時には6年生の児童が見学に訪れました。



2 児童1回目制作



6年生の児童が作家と同じく「アミアミアミーゴ」を使い作品を制作。1回目は教科書やキット教材の記載に基づき制作しました。

日程 11月2日(6年1組、6年2組)



3 動画視聴



6年生の児童が業前時間などを使い、プロセス1で撮影した動画を視聴。動画ではあえて作品の最終形を見せず、アーティストが制作に取り組む姿勢や制作のプロセスに重点を置いて編集しました。

日程 11月11日~13日(6年1組、6年2組)



←QRコード



4 児童2回目制作



動画を視聴した後に、児童は2回目の制作に挑みます。2回目は児童も自由に素材や道具を追加できるように、あらかじめ準備をしてもらいました。2回目の制作で最も重視したのは「自分なりの用途」を考えた上で作品を作る、ということ。授業にはアーティストも加わり、児童とコミュニケーションを図りながら共に悩んだり、材料を見つけに校庭へ出かけたり、一緒に制作を試してみたり…。

アーティストに刺激を得た児童たちは、それぞれ自分なりに工夫してアイデアを考え、作品づくりに取り組みました。出来上がった作品は児童同士で鑑賞し合い、他者から学ぶことで、多様性を認め合う機会にもなりました。

日程 11月20日(6年1組) / 11月27日(6年2組)



子どもたちの声

アーティストの動画を見ての感想や、自分の作品づくりの参考にしたいところは？

作品作り参考にしたことは楽しく自分なりに作ることや、自分で思った通りに作り、作りながらどんどん新しいアイデアを作品につめていきました。

アーティストの動画を見て色々な発想があってすごいなと思いました。特に風船を最後に割って作るのが面白かったから参考にしようと思いました。

身近な物を使って作品を作るところを参考にしたい。周りの人と交換などしながら作りたい。使えるものを探しているんなものをしたい。

いろいろな考え方や、やり方があったので「あ、こいつやり方もあるんだ」と思いました。少し工夫すれば新しいものができるということを知ることができました。自分も少し工夫して新しい物を作れるようにしたいです。

2回目の作品づくりの感想

1回目とは違い2回目は家から材料を持ってきたのでとても楽しかったです。

2回目のほうが上手に編めたと思います。紙がたがったので水でやわらかくして工夫できた作品になりました。

使えるものを作れた。紙バンドがなまめになってしまっているところが少しあるので、ていねいにやればよかったと思った。リボンに毛糸を巻くのをがんばった。ボロボロになるまで使いまくりたい。

組み立てたり、いろいろためしながら作ったり想像していなかったものが出来た。やってたらだんだん楽しくなってよかった。がざりつけが楽しかった。

先生たちの声

前橋市立宮城小学校 6年担任 関口 珠花

コロナ禍で我慢することや制限されることが多かった子どもたちに、前向きになることや自分を表現する場を与えてくれたのがアーティスト・イン・スクール(AIS)です。特に、「アミアミアミーゴ」の授業では、アーティストの動画を見て、たくさんの方と関わり合いながら作品づくりをすることで、子どもたちは今まで気付かなかった『自分』に出会うことができました。また、私たち教師は、

子どもたちの素敵な『笑顔』に出会うことができました。行事等が相次いで中止になり、思い出作りをするのが困難なか、子どもたちの心のアルバムにAISの活動を深く刻むことができたこと、そして、子どもたちと向き合っただけの素晴らしさを伝えて下さったことに感謝致します。ありがとうございました!!

前橋市立宮城小学校 6年担任 松永 典明

「アーティストと一緒に授業を行う」AISの活動は、児童にとって新しい学びとなり、今までにない発想を与えてくれた。これまでの図工では、既存の教材や参考作品に影響を受けて、何となく「このように作りましょう」と捉えてしまう児童も少なくなかった。ところが、アーティストの固定概念に縛られない制作の様子を見て、「そんなことをしていいの？」から「こんな方法をして

みようかな」という考えに変わる児童が現れ、この企画のもつ魅力や素晴らしさを直ぐに実感することができた。中にはアーティストの技法にも興味をもち、直接指導してもらった児童もいた。普段の授業では得られない貴重な体験をさせてくださったアーティストの方々に、深く感謝したい。

学習指導要領における「アミアミアミーゴ」の位置付け

本題材は第6学年を対象としており、児童は「使う様子を思い浮かべたり、ひもや紙を織ったり編んだり組んだりしながら表したいことを見付け、形や色などの造形的な特徴を捉えながら、表し方を工夫して表す」1) 活動に取り組む。実践にあたりプロジェクトチームでは、本題材の以下のような学習指導要領上の位置づけを確認し、共有を図った。2)

		[第5学年及び第6学年]	
1 目 標	「知識及び技能」	(1) 対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して理解するとともに、材料や用具を活用し、表し方などを工夫して、創造的につくったり表したりすることができるようにする。	
	「思考力、判断力、表現力等」	(2) 造形的なよさや美しさ、表したいこと、表し方などについて考え、創造的に発想したり構想したり、親しみのある作品などから自分の見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。	
	「学びに向かう力、人間性等」	(3) 主体的に表現したり鑑賞したりする活動に取り組み、つくりだす喜びを味わうと共に、形や色などに関わり楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養う。	
2 内 容	A 表 現	「思考力、判断力、表現力等」	(1) 表現の活動を通して、発想や構想に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。 イ 絵や立体、工作に表す活動を通して、感じたこと、想像したこと、見たこと、伝えたいことから、表したいことを見付けることや、形や色、材料の特徴、構成の美しさなどの感じ、用途を考えながら、どのように主題に表すかについて考えること。
		「技能」	(2) 表現の活動を通して、技能に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。 イ 絵や立体、工作に表す活動を通して、表現方法に応じて材料や用具を活用するとともに、前学年までの材料や用具などについての経験や技能を総合的に生かしたり、表現に適した方法などを組み合わせたりするなどして、表したいことに合わせて表し方を工夫して表すこと。
	B 鑑 賞	「思考力、判断力、表現力等」	(1) 鑑賞の活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。 ア 親しみのある作品などを鑑賞する活動を通して、自分たちの作品、我が国や諸外国の親しみのある美術作品、生活の中の造形などの造形的なよさや美しさ、表現の意図や特徴、表し方の変化などについて、感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を深めること。
		「知識」	(1) 「A表現」及び「B鑑賞」の指導を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。 ア 自分の感覚や行為を通して、形や色などの造形的な特徴を理解すること。
「共通事項」	「思考力、判断力、表現力等」	イ 形や色などの造形的な特徴を基に、自分のイメージをもつこと。	

学習指導要領における以上の位置付けを基に、プロジェクトチームでは本題材における学びの要件を以下のように解釈し、アーティストへの提案をおこなった。

- ・生活のなかで使いたいものをイメージし、**自分なりの用途**(飾るもの、使えるもの)に基づき、計画・制作してください。
- ・編む、組む、織るなど、古来からの造形行為(知恵と工夫、技)を意識しながら、造形表現の特徴(形や色、動きやバランス、材料の特徴、構成の美しさ)を捉え、表し方を工夫して表してください。
- ・自分や他者の作品について、**実際に使うことを踏まえ**、造形的なよさや美しさ、表現の意図や特徴、表し方の変化などについて、感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を深めてみてください。

1) 日本文教出版 Web サイト(小学校図画工作)、「お役立ち資料(令和2年度使用)平成27年度版題材別カリキュラム・評価規準例」、<https://www.nichibun-g.co.jp/textbooks/zuko/>(2020年2月閲覧)
2) 文部科学省、『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 図画工作編』,日本文教出版,2018年,pp.81-103

アーティスト・イン・スクール (AIS) アドバイザー兼 コーディネーター 3 人によるふりかえりトーク

コーディネーター

井上 昌樹

6年間の小・中学校教員経験(群馬県公立小・中学校)を経て、東京福祉大学短期大学部にて造形表現の科目を担当。

郡司 明子

12年間の小学校教員(群馬県公立小学校、お茶の水女子大学附属小学校)を経て、群馬大学にて美術教育を担当。

茂木 克浩

13年間の中学校教員経験(群馬県公立中学校)を経て、足利短期大学にて造形表現を担当。

郡司 今回のキット教材※を使った AIS プログラムを通じて印象深い出来事はありますか？

井上 「編まなくてもいい」という流れですね。工作中「編む」行為を前提とした題材でしたが「編まなきゃいけないの？」というアーティストからの問いは新鮮でした。特に工作は技法や素材など共通のものから出発して個々の表現を展開していく、というイメージでいたので、「編まない」となった時に「この授業をどう成立させようか」「評価はどうなるのか」「自分だったらどうするだろう」と色々考えさせられました。この題材に対して「編まない」という発想にはなかなか至らなかったのが、衝撃的でした。

郡司 そこには現場の先生方も戸惑いつつ、アーティストの示す方向性に驚きや新鮮さを感じていたようですね。私たちの提案としては「自分なりの用途」にこだわることを一義的な目標にしていたので、そこに対して評価(フィードバック)する視点を大事にしたいですね。その意味では、編むー編まないを問わず、素材を組み合わせて部屋に飾るオブジェをつくる、とか、クレモモに触発されたのか、パラシュートと風船を組み合わせて高いところから物を落とす装置をつくるような人もいて広がりが見られました。

茂木 私たちコーディネーターは元々教員なので、学校の授業の枠内でどこまで広げていけるのかを考えがちですが、アーティストが入るとより深い根の部分から揺さぶられます。その衝撃は大きいですね。それでどこで折り合いをつけられるか、あらためて対話が重要だと思いました。学校内外のそれぞれの立場でいかに対話していくか。AIS のようなプログラムだと外部から講師が入ることに抵抗を感じる方もいらっしゃると思います。その中で気を遣うこともあります。依頼する側と受け入れる側がいかにフェアで対等な関係性でいられるかが大事だと感じました。

郡司 お互いに「つくっていく」という感覚が持てるかですね。学校内外の異なる立場から最終的に子どもの幸せとか学びの充実につながる方向を共有して対話できるといいよね。

茂木 また今回子どもたちの変容を見ることができましたが、それでも 1 回で変わるのには限界があると思いました。幼児教育の頃から身につけてきた「言われたように作品をつくる」という考え方を切り崩していくのは、非常に困難なことだと感じます。アーティストが入ったことで子どもたちがどのように変化していくのか、既存の価値からはみ出すような広がりがみられるかどうか、この後の活動も継続的に見ていきたいですね。この取り組みがイベント的に終わってしまうのもったいないですね。

井上 そのあたりの成果の一つとしては、後日行われた水墨画の授業に現れたように思えます。授業自体の自由度が高かったというのがありますが、子どもたちが自分で素材を集め、自分なりの筆をつくるといった、実験的な取り組みに対して、多くの児童が主体的に活動している様子を見ることができました。これまでのアーティストと触れ合ってきた経験も大きく影響しているように感じられました。

郡司 なるほど、いい姿!と同時に、速攻で成果が出ることを私たちも期待してしまうけど、過去の経験が後々に生きることもあって、長いスパンで捉えることも必要になりますよね。

茂木 そう考えると、同じ学校で継続して取り組む価値もありますね。低学年のときに AIS を経験した子どもがどうなっていくのか見てみたい。

郡司 私にとってインパクトが強かったのは、工作題材で「つくらなくてもいいのでは?」とアーティストが投げかけたこと。「紙バンドをどう使う?」という問いに「ヤギに食べさせる」と言った子どもがいて、それに対して、本当にヤギを飼っているうち

の子から「お腹こわすからやめてください。」っていう意見が出たのね。そんな議論を通じて思考を飛ばすこと、想像を巡らすことの面白さの入り口に立ったとき、図工で「つくらない」ことも「あり」なのでは?というアーティストの主張だったわけ。教員ベースで考えると、既に学習指導要領の枠組みがインプットされているから工作題材で「つくらない」は「ない」と思ってしまうけど、アーティストはそういうこと度外視で言ってくるでしょ?そのときに、学校の暗黙知というカルールと外の人の価値判断の狭間で、ちょっと待てよと、私たちが立ち止まる必要が出て、だけど、これ工作題材としての授業でやるからなーとか、でもアーティストが入るとするのは特別なことだからそこまで「あり」かな、とか調整役としても迷わない?

茂木 迷いますよね。結局、学習指導要領には形、色、イメージがあって。教科の前提として形に表現するというのがあるわけですよね。そこで「つくらない」という選択肢がきたときには「んー」っていう……。私たちが揺さぶられるように現場の先生たちは、「じゃあ、図工って何?図工って授業って何なの?」となりますよね。

郡司 でも、アーティストが入るからには、そこまで飛躍したり、そこをもっと膨らませたりする方が、俄然、意味が出てくると思うんだよね。その辺りがどうあったらよかったのかな、と。今回、最終的には「もの」があって、形にしていく方向性で終始した感はあるんだけど。図工は、作品の有無に限らず、自身で意味や価値を「つくる」時間だと思うので。

茂木 やっぱ、アーティストの意見を学校の先生方にも聞いてもらいたいですよね。実は、アーティスト・イン・スクールって、子ども向けにやっているけれど、本当はアーティストの思考とか見方を先生たちに知ってもらう役割があると思いますね。そのためにも先生たちとアーティストが対話する機会が必要ですよね。アーティストと先生も一緒に図工の時間を「つくる」。

郡司 そうね、そして願わくば、保護者ともアーティストの見方・考え方を共有していけるといいですね。

茂木 子ども、保護者、図工・美術をめぐる多様な関係者で集まって、意見を出し合うなかで新しいビジョンを創り出せるといいですね。前橋から発信したいですね。

井上 子どもたちの中にはつくることに迷いのある子もいて、そこにアーティストが根気よく対話を続けて、子どもたちの中にある葛藤を引き出していましたね。

郡司 子どもの根源的な思い、表現の源を掘り起こす、ということですね。本当にあなたがしたいことは何?あなたはどうか?という本質的な問いを投げかけられるか、どうか。その点において哲学をもって表現に向き合っている人は熱量が違う。

茂木 とすると、アーティストが入ってアイデアが広がったね、技能的に高まったね、作品がこんなに変わりましたね、と表層的になりがちだけれど、本質はむしろ、そういった迷いのある子どもたちの姿から図工の授業を問い直す、ということなんでしょうね。

郡司 そうですね、私たちのミッションは、今回の「編む?教材」を通じて図工や学校の価値観を編み直す、ということでした。では、今後に向けてのご意見をお願いします。

茂木 継続できることが 1 番大切だと思います。社会に開かれた教育課程と言われていますが、地域にある資源、アーティストや美術館、研究者を使うことでより豊かな教育活動ができる可能性があると思います。それができる土壌をいかにつくっていくか。単発ではもったいなくて、今回やったことをいかに継続し発展させていけるかにかかっていると思います。そうすることで前橋から新しい美術教育のあり方やそのモデルを発信できるのではないかと考えています。

井上 アーティストとの協働的な授業づくりを通して、子どものための授業でありながら、先生のための研修としても捉えてもらえるんじゃないでしょうか。アーティストの視点が先生方の図工・美術に対する価値意識をアップデートし、子どもの多様な学びに対して柔軟に対応できる資質の向上につながることを期待します。一つの事業が先生方の変化を生み、その先生の授業によって子どもたちも変化していく。そういう意味でも AIS の事業を広めていけるといいなと思います。

郡司 学校は閉じてしまいがちな場所なので、これからも外との交流を通じて多様性が行き交う機会を大事にしたいですね。アーティストは繊細な感覚を働かせて、社会の問題や課題に真っ先に気づきアクションを起こす「炭鉱のカナリア」ですから。社会や学校とアーティストをつなぐこと、その役割が AIS なのですね。

※「キット教材」

「キット教材」(セット教材、市販教材ともいう)は、予め制作に必要な素材が詰め合わされて販売されている教材のことをさす。多くの場合学校の授業での活用を念頭に制作されており、教科書の題材と全く同じタイトルで販売しているものもある。キット教材を用いることで、同じ質、同じ量の素材が全児童に平等にいきわたる。教師が一つひとつの素材を選定する必要がなく準備に手間がかからない。また多くの教材には完成作品の載ったパッケージと手順書が同封されており、教師の専門性や経験年数等に左右されず活動を行うことができる。そのため多くの学校現場で利用されていることが予想される。その一方で決められた素材と手順書通りの展開によって、児童の想像性/創造性が制限されてしまうという危険を孕んでいる。



水墨画の授業で、中島さんがつくった炭を児童たちに見せたときの様子

人々が持っている「当たり前」を、日常とは異なる視点から問い直す。

アーティストの中島佑太さんは2学期より定期的に宮城小学校に通い、児童との交流を図っています。授業では図工の授業の補助教員として関わるほか、自身のアーティストとしての活動のプレゼンテーションを行ったり、ワークショップを実施することもありました。また、体育や学級活動の授業に児童と同じ立場で参加するなど、長期的で多面的な関わりを持ち、児童や教員との信頼関係を築いています。R2年度はコロナ禍という状況で、特にこれまでの「当たり前」が大きく揺らいだ年となりました。問題を解決する力のみならず、問題を見つける力や新しい発想力が必要とされています。そこにアーティストならではの視点で、児童たちと対話を続けています。

プログラム概要

期間	令和2年度2学期～3学期
場所	宮城小学校 6年生各教室、4年生教室、体育館など
対象	宮城小学校 6年生2クラス、4年生1クラス、他

アーティスト

中島 佑太 Yuta Nakajima

1985年群馬県前橋市生まれ、在住。幼少期を南橋団地で過ごし、ワークショップを手法に活動するアーティスト。2017年からアーツ前橋のアーティスト・イン・スクール事業に関わっている。



休み時間は子どもと一緒に校庭で遊びます。楽しいコミュニケーションの時間。



体育の時間にも子どもたちと同じ立場で参加。多面的に関わることで信頼関係を築きます。



この日は自身のアーティストとしての活動のプレゼンテーションをする回。児童にとっては新たな世界を知るきっかけ。

炭から墨汁をつくり、自作の筆で描く水墨画の授業



中島さんは前ページの「アミアミアミーゴ」でつくった作品を墨汁づくりの材料にしました。



炭を砕いて墨汁をつくります。



児童たちは、それぞれ工夫した自作の筆で描きました。

前橋市立宮城小学校 校長 藤井 麻里

令和2年度は、新型コロナウイルスの影響で、多くの行事が中止となる中で、「アーティスト・イン・スクール (AIS)」は一条の光となった。「アーティストが学校に来る」それだけでも、子ども達はわくわく。本来、子ども達は、多様な人々と関わりながら多様な考え方に触れ、新たな発見と学びを深め、本物の体験等を積み重ね成長する。AISはまさに、その学びを展開してくれた。

中島佑太さんをはじめ、様々なアーティストがたびたび来校して、先生方や子ども達と対話しながら活動を展開。6年生の図工では、子ども達の既成概念をアーティスト群が見事に打ち破り、子ども達の発想(制作)に自由を与え、より創造的に取り組む姿がそこにはあった。作品ばかりではなく、子ども達の目の輝きやその姿から、創造する喜びがあふれていた。授業の詳細は実践報告を参照されたい。

関わりを深める中で、子ども達は中島さんを兄のように慕い、中島さんは、もはや一人のアーティストではなく、子ども達と先生方の仲間となった。学びは仲間と創り上げるもの。これから、中島さんと子ども達はアイデアを出し合い共に作品を創っていく。何が出来るのか、それは子ども達と共に考える。決められたルールの上を、ひたすら走り続けるような教育ではなく、学びの道を自分達で切り拓いていく、それが、真の子ども達主体の学びではないだろうか。子ども達は、今日も、自分達の思いやアイデアを、中島さんを交えた仲間と語り合っている。そんな姿が輝いていて美しい。結びに、このような機会を与えていただいたアーツ前橋の職員の方々、係わっていただいた多くのアーティストの皆さん、支えてくださった群馬大学の郡司先生他、大学の先生方に心より感謝いたします。

前橋市立宮城小学校 図工主任 樺澤 洋子

「子どもたちの生きた学びのために、本校でAISをやしましょう!」という藤井校長の一言で、コロナ禍での不安や不満をも吹き飛ばしそうな新しいチャレンジが始まった。リスクを超える実りを子どもたちにプレゼントできるなら、今だからこそ積極的にチャレンジしようと手を挙げたことで、本校は今年度唯一のAIS実施校となった。AISプロジェクトチームの皆様が、できる限りのすべてを本校だけに注いでくださる状況になったことは、願ってもない幸運だった。

素敵な大人達が魅力的なものを見せてくれたり、一緒に楽しいことをしてくれたりするのだから、そこに最上級の感動や喜びがあるのは当然のこと。子どもたちの学びの幅は大きく広がり、豊かな経験が生み出すものは計り知れない。アートと教育の融合は未知の可能性を秘めている。AISがもっと教育現場に浸透することを心から願っている。

アーティスト・イン・スクール 実施の流れ

1

派遣アーティスト決定

これまでに展覧会に参加したことのあるアーティストなどから、アーツ前橋が派遣アーティストを検討します。実施を希望する学校や、前橋市教育委員会と相談のうえ、決定した学校に対し、実施時期や内容を踏まえて派遣アーティストを決定します。

2

打ち合わせ・下見

コーディネーター、アーティスト、アーツ前橋スタッフが学校を訪問し、児童・生徒の皆さんのふだんの様子や先生のご希望をうかがい、プログラムの詳細について打ち合わせします。また、会場となる場所の下見を行います。児童・生徒の皆さんの肖像権についても、予め確認させていただきます。

3

アーティスト・イン・スクールの実施

スタッフやコーディネーター、教育を学ぶ大学生などがサポートで入ります。今後のAIS事業に反映するため、終了後に児童・生徒の皆さんや先生方へアンケートの実施をお願いする場合があります。

4

報告書・記録写真・映像の確認

年度末までに報告書や記録映像などを作成します。学校へ内容を確認させていただいた上で、アーツ前橋の公式サイトで公開します。

*原則として、前橋市内に所在している学校で実施します。/ *学校側の費用負担はありませんが、学校にある機材や道具をお借りすることがあります。

これまでに実施してきたプログラムについての詳細はアーツ前橋公式サイトに掲載しています。ぜひご覧ください。



QRコード

主催：アートによる対話を考える実行委員会・アーツ前橋
助成：令和2年度文化庁 地域と共働した博物館創造活動支援事業
コーディネーター：郡司明子、茂木克浩、井上昌樹
Photo：Lo.cul.p(木暮伸也、志村真悠) ●印を除く